身延山久遠寺に関する研究1

ー 総門・茶屋及び発軫閣を対象として ー

Keywords
身延山　久遠寺　日蓮宗
総門　発軫閣　文化財

AK15030　清川 瑞希

1. はじめに

1.1　研究背景・目的

日蓮宗の総本山である身延山久遠寺は、何度も火災の被害に見舞われている。その中でも、明治8（1875）年に起きた火災は最大であり、本堂、祖師堂といった主要堂宇だけでなく子院、町屋を含め144棟の堂宇に広がり、大きな被害をもたらした。現在残されている堂宇のほとんどが、火災後に再建されたものが多くなっている。ただ、その中でも身延山の中央伽藍よりもかなり南下したところにある総門及び発軫閣とその周辺は、この大火災を免れた。そのため、明治の大火以前から残っている建造物として貴重なものである。久遠寺では、祖師堂、御真骨堂や三門、甘露門などの現在19件の建造物が登録有形文化財になっている。

本研究では、山之坊が管理を行っている総門、総門茶屋及び発軫閣を対象とする。これらを身延山久遠寺における歴史的価値を再評価し、登録文化財に申請するための基礎資料の作成を目的とする。

1.2　研究方法

(1)実測調査及び図面作成を行う。
(2)文献、棟札、絵図等を基に分析・考察を行う。
(3)歴史的価値を明確にしていく。

1.3　実測調査

調査日：2018/08/06~08/08
調査地：山梨県南巨摩郡身延町3567

2. 身延山久遠寺について

2.1　身延山久遠寺の概要

表1　久遠寺の概要

所在地	山梨県南巨摩郡身延町3567
宗派	日蓮宗
寺格	総本山
本尊	三宝尊
創建年	弘安4（1281）年
開山	日蓮
開基	南部実長
正式名称	身延山妙法華院久遠寺

身延山は甲斐の国波木井郷を治める地頭の南部実長の領地であった。日蓮聖人は信者であった実長の招きにより、文永11（1274）年5月17日、身延山に入山し、同年6月17日より西谷に構えた草庵を住処とし、身延山久遠寺を開山した。弘安4（1281）年に改めて、寺院として境内を整備し、その際に南部氏が十間四面の大堂を寄進し、日蓮自ら身延山久遠寺と命名したと伝えられる。以来身延山にこもり法華経の読誦と門弟たちの教導に終始した。弘安5（1282）年に身延山をたち、武蔵国池上に住む池上宗仲の館で入滅し、遺骨は身延山に奉られている。

久遠寺は大部分が山岳地帯を占め、身延山北西部の標高1148mの身延山の中にある。周囲には高取山、七面山の山々に連なっているため、太平洋沿岸からの湿った空気が冷えて多量の雨をもたらす。このような条件は建築的に適していないことが分かる。しかし、土壌の空気や水の流通が良好で宗教的景観が良く、杉や檜などの良質な建材を得やすいという利点が挙げられる。

2.2　山之坊について

総門、総門茶屋・発軫閣を現在、管理している山之坊は元亀3（1572）年に第十五世日敍上人が創立し、日徳上人が開基した。元々総門、総門茶屋、発軫閣は園柳坊が管理していたが、明治7年から同10年にかけて、身延山では廃仏毀釈や、火災等の影響で多くの支院が廃合併を余儀なくされていった。山之坊もその影響を受け、明治7（1874）年に園柳坊と合併し、同10（1877）年に東之坊と合併した。

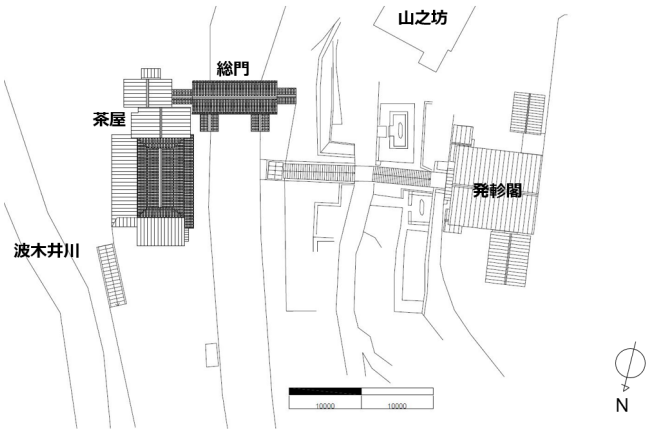

図1　総門・茶屋・発軫閣　配置図

3. 対象の堂宇について

3.1. 総門について

寛文5（1665）年に建立した。昭和44（1969）年に身延町指定文化財になった。「開会関」という扁額は妙法五字の尊い教えですべての人々の心を開き、平等に救い、仏と同じ寂光土に入ることができる関門である、つまりここから仏の世界である、という意味である。前述の通り、総門は明治大火を免れた門である。富士川支流の波木井川を北上すると総門があり、総門をくぐり北に坂道を登っていくと壮大な三門があり、そこを過ぎて身延の境内に至る。

一間一戸の高麗門であり、左右に本瓦葺、切妻屋根の袖塀が設けられているが、袖塀は古写真と現在を見比べると、袖塀の高さが違うことからにこの期間に付加したものであるといえる。基本構成は、二本の角柱の本柱上部を冠木で貫いて連結し、肘木と腕木および軒桁で切妻屋根を受ける。冠木中央に束を立てて、本柱同様肘木と腕木を受け、また冠木先端は渦・若葉彫刻のある木鼻となっている。冠木上部は格子をはめる。この門には軸吊扉が見られないことが特徴的となっている。

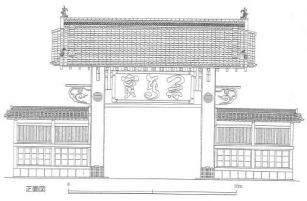

図2　総門　正面図

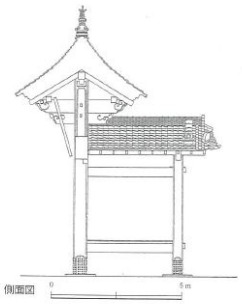

図3　立面図

3.2. 総門茶屋について

明治27（1894）年に建立した。昭和52（1977）年に増築された。現在は使用されていないが、元々は茶屋として使用されており、参拝者の休憩所としての役割を持っていた。昭和初期に入り、参拝者が徒歩や馬での移動から自動車やバスの整備、身延鉄道の開通などの交通手段の発達により総門茶屋は通り過ぎるだけになってしまい、やがてお休み処として使用されなくなっていったと考えられる。

写真1　総門・茶屋　外観

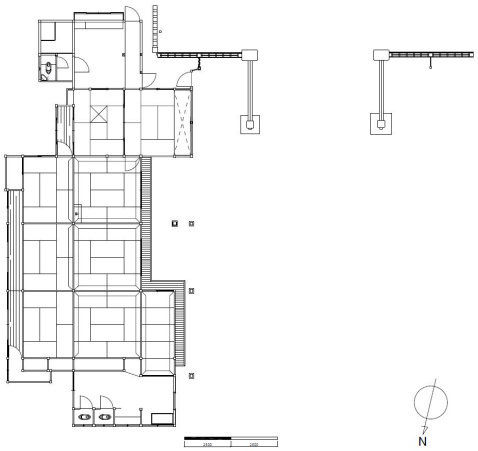

図4　総門・総門茶屋　平面図

3.3. 発軫閣について

「身延山諸堂記」によると、慶安3（1650）年に建立した。元文4（1739）年、明治6（1873）年、大正5（1916）年に改修、昭和54（1974）年に増築している。「発軫」とはここから始まったという意味であり、日蓮聖人の身延山での生活がここから始まったことをいう。身延の地に初めて立ったのが、発軫閣と言われている。別称は「逢嶋（おうしま）堂」とも呼ばれる。

写真2　発軫閣　外観

基礎構造は桁行5間、梁間5間、前面入母屋、妻入、背面切妻、銅板瓦棒葺屋根、組物は外回り、出組、出隅（鬼斗あり）。

発軫閣は、建築当初は日蓮宗の基本的な仏堂である3間四方の仏堂であった。何度も増改築を行って現在の形態になった。また、日蓮宗の堂宇に多くみられる妻入屋根の長堂形式をとっている。仏堂では、平入屋根が一般的だが、発軫閣は増改築の際に仏堂が奥に増築されていくことによって屋根が妻入になり長堂形式になったとされる。

左：写真3　棟札（表面）
右：写真4　棟札（裏面）

右記の棟札を見ると、明治6（1873）年に非常に数多くの人名が書かれており、棟札の大きさも通常よりも大きいものとなっており、この時に大規模な改修が行われたと推測できる。

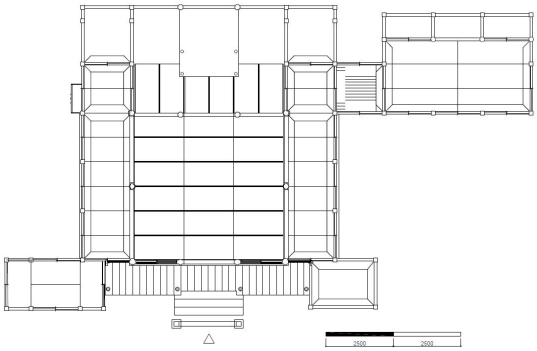

図5　発軫閣　平面図

4. 総門・発軫閣の変遷

4.1. 絵図・古写真による分析

総門、発軫閣、総門茶屋の変遷を身延山絵図屏風、身延山絵図、身延山図経、身延山全図等の絵図と古写真を基に、辿っていく。

まず「身延山絵図屏風」（図6）を見ていくと、これは発軫閣、総門が建立して直後の絵図である。この絵図を見ると、発軫閣は現在の入母屋造とは異なっており、方形造に見られる。総門には袖塀がないことが確認できる。「身延山絵図」（図7）をみると、袖塀が建てられたことが分かる。

左：図6　「身延山絵図屏風」（1665～1667年）
右：図7　「身延山絵図」（1673～1681年）

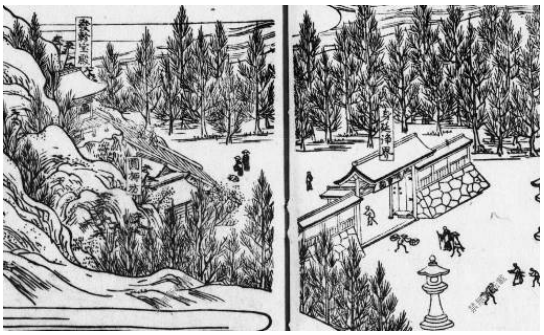

図8　「身延山図経」（1741年）

次に発軫閣は、元文4（1739）年に改修が行われており、「身延山図経」（図8）はその直後である。この時に大幅な改修があり、それに伴って入母屋造妻入の形式になったと考えられる。

左上：写真5　大正2年　右上：写真6　大正10年
左下：写真7　昭和6年　右下：写真8　現在（2018年）

そして、古写真を見ていくと、大正2年（写真5）の古写真の時から、総門の大屋根は桟瓦葺になっている。総門は、大正2年から大正10年（写真6）にかけて、地面が階段から坂道へと変わっていることから、この期間に身延山への交通手段が変わってきたことが分かる。昭和6年（写真7）と現在（写真8）を比較すると、総門の左右に設けられている袖塀の高さが異なっていることが確認できる。

4.2. 発軫閣の発展について

発軫閣は先述したように、図9のように3間四方の仏堂から現在の平面図になるまでに多くの増改築を行っている。そのため、これより発軫閣の再分析をしていく。

まず、慶安3（1650）年に建立した発軫閣は、「身延山絵図屏風」では屋根は平入屋根に見える。続いて、「身延山絵図」では、現在と同じ入母屋造妻入に見える。次に「身延山図経」でも入母屋造妻入に見える。
これらのことより、図9の年代のように増改築が行われたと考えられる。

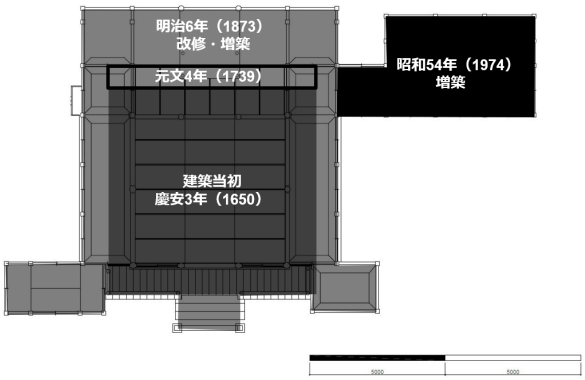

図9　発軫閣　増改築

5. 妻入長堂形式の堂宇について

発軫閣の特徴として述べた妻入の長堂形式の堂宇の事例について、関東甲信越の地域を対象に「近世社寺建築報告書集成」に記載、もしくは文化財に登録されている堂宇を調査した。その結果、妻入の建物は、計39棟であった。

そして、宗教別に見てみると、日蓮宗は8棟であった（表2）。都県別に見てみると、長野県の13棟が最も多く、次いで身延山のある山梨県は11棟であった。これらのことから、発軫閣は近世の建物であり、当時の甲州や信州で多く用いられている形式である。

表2　宗派別棟数

宗派	棟数
日蓮宗	8
臨済宗	8
真言宗	6
曹洞宗	4
天台宗	3
浄土真宗	3
浄土宗	1
その他	6
合計	39

これから、日蓮宗の妻入長堂形式の仏堂の事例を見てみる。昭和36（1961）年に東京都指定文化財になっている妙福寺祖師堂（図10.写真9）である。寛文12（1672）年に池上本門寺祖師堂から移築されたものであり、建立はそれ以前だと考えられている。昭和44（1969）年に解体、修理されている。基本構成は、桁行4間、梁間3間の銅板葺、入母屋造妻入となっている。内陣の奥に須弥壇を置き、その上に厨子を安置している。17世紀前期の建築の貴重な遺構である。

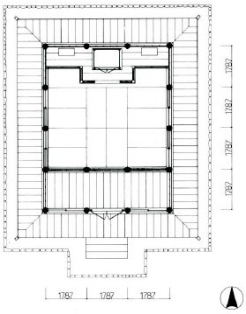

図10　妙福寺　平面図

写真9　外観

山梨県甲府市下今井に所在する常光寺本堂（図11. 写真10）である。文化15（1818）年に建立した。基本構成は、桁行5間、梁間6間、桟瓦葺、入母屋造妻入となっている。建築規模や平面構成が発軫閣に類似していることが分かる。発軫閣と同様に内陣の奥に須弥壇を設け、左右に脇陣を設けるといった形式をとっている。

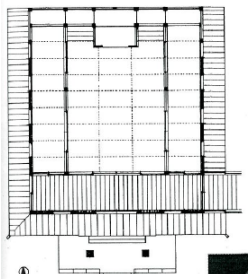

図11　常光寺本堂 平面図

写真10　外観

これらの他にも数多く、妻入長堂形式の仏堂が挙げられる。山梨県と長野県を中心に甲斐善光寺本堂、信州善光寺本堂、妙蓮寺祖師堂、医王寺太子堂、妙蓮寺観音堂、永泰寺釈迦堂などがある。身延山久遠寺では、祖師堂や莚師堂、妙石坊祖師堂、松樹庵などとこの形式の仏堂が多く残っており、日蓮宗寺院の特色が強く残った建築である。

6. 総括

本研究では、総門は現在、身延指定文化財になっており、県指定文化財へ向け、研究を進めてきた。対象とした各棟は、明治8年の大火の被害を受けておらず、身延山久遠寺の入口として重要な役割を担っている。総門は建築当初から袖塀が17世紀から18世紀前期頃に付加されており、屋根は檜皮葺から桟瓦葺に葺き替えられている。門自体は保存状態が良く、当初の形を保っていることが分かった。

総門茶屋は、明治27年に建立、昭和52年に増築された建物であり、増築部を除き、登録文化財に申請する。当時の参拝者のお休み処として必要不可欠な場所であったと考えられる。

発軫閣は、昭和54年の増築部を除き、登録文化財に申請する。組物絵様の様相からは元文4（1739）年の改修の影響が大きかったと考えられる。

一方で、「身延山絵図屏風」（1665～1667年）にある平入形式と、その直後の「身延山絵図」（1673～1681年）にある妻入形式では、屋根形状が大きく変わっており、棟札等の文献は残っていないが、この間にも改修があったことを伺わせる。本研究では、「身延山諸堂記」による慶安3（1650）年を建立年と考え、その後1667～1673年期に屋根を変え、「身延山諸堂記」に記録にある元文4年に組物を改修し、近代に入った明治6年にも大改修と増築を行なったと考える（棟札より）。そして、昭和54年の増築で現在の姿になったと考察する。日蓮宗の特色である妻入長堂形式を残しつつ、何度も増改築を行っている。総門・発軫閣は17世紀にできた貴重な建造物であると言える。

参考文献

1)荘司柚太『身延山久遠寺研究　－伽藍の変遷について―』2014年度芝浦工業大学卒業論文

2)『身延山坊跡録　別冊』身延山坊跡録編集委員会1994

3)『山梨県文　文化財編』山梨日日新聞社　1999

4)『身延山久遠寺史研究』　林是晋　1993

5)『身延山史』『続身延山史』『身延山諸堂記』

6)『身延山史年表』望月一靖　1985

7)『近世社寺建築調査報告書集成　3～7巻』東洋書林　2004